

《頭のさきから足のさきまで》

—— 冬田君のはなし ——

まるやま ひろし

「むづかしもの読んでほりまん」と隣の酔漢がのぞきこんできた。冬田君は「生産と技術」の正月号の新津さんの面白い話を通勤電車の中でよんでいた。9時頃にもなれば、一杯気嫌の酔客が、とろんとした目で、ものぐさそうに座席にふんぞりかえっている。なにしろ、「生産と技術」は、これ以上小さな活字で組んだら、とくも読めそうにもない、むづかしい専門用語で、凸版の数字などは、虫眼鏡でもつかわないと、読めないグラフが満載されている。なんと勉強家ぞろいの執筆者ばかりなのだろう。読者の諸君も、なんと勤勉な研究心の旺盛な方ばかりなんだろう。冬田君は、こんなことを考えながら、新津さんの博識ぶりに舌をまいて、読みふけた。そんなわけで、石橋の駅についたときは、いつもよりも梅田と石橋の間が短いような気がした。

◇

この頃冬田君はつまらんことを云ひだした。一体彼は真面目に考へているのだろうか。一つ二つ彼の話をきいてみるのも、ひまつぶしになるだろう。忙中閑あり。むづかしい「生産と技術」のなかに一つぐらいのんびりした、たわいのない話がのったところで、これも趣向が変わってよかろう。勝手なリクツをつけたものだ。

だいたい、科学者とか技術者とか云う御仁は、なんで科学的とか、技術的とか、生活百般に合理性を要求してやまない。ところが冬田君は少々、それに食傷しはじめていいる。タバコを飲みだしたのも、その一つの現象らしい。最近タバコの害が新聞にアカアカと出だしても、少しも頓着しない。酒もたしなむが、彼は日本酒一点ばりで、毎晩たのしそうに晩酌をやる。労働者が一日の張りつめた仕事のあとで、一杯、キューとやる、あの気持ち、とても共感できるようになったと云う。

ところが、彼は酒に強いのか弱いかわからん。いくら飲んで、酔ひつぶれたことがない。適量以上はすすめてものまないのだから、相手になった方が歩がわるい。酒席では寝込むわけにはいかんが、自宅では、すぐ寝込んでしまう。茶の間兼寝室兼居間の小さな冬田君の家では、あつらえむきにできている。

◇

漱石なんて夏目君はペンネームをつけたが、冬田君は

枕水なんて不粋なペンネームはつけなかった。彼は自然石を枕にしている。西式健康法では木枕をすすめている。陶枕は不老長寿に効ありと宣伝して百貨店で売っている。あのパンヤや羽毛のはいった枕などは、冬田君の最も苦手で、旅行先ぎで、やわらかな枕をだされると、いつも閉口する。冬田君の愛用している自然石の枕はふるっている。うまい工合に後頭部がのっかるようになっていいるが、猪名川の上流でひろってきたものだと云う。

微酔に陶然とした冬田君の頭が、光沢のでた自然石の枕の上ののると、ヒヤッとして、気持ちよく、睡魔の囚となる。冬田君は自画自讃して、酒は百薬の長、枕は石にかぎる、と云うのだから、ものは験し、どなたか実験してみませんか。どうも彼の頭は石頭らしい。床屋のおやじが云う。「おたくの頭は毛もかたくて、鋏の歯が欠けますよ」と。はじめの方は当っているが、あとの方は冗談だ。あたりまえさ。それでも若い時よりは、毛も軟かくなったんだと冬田君は床屋のおやじに弁解する。

◇

冬田君はこんなことも云いました。

「僕は、この頃になって、やっと腹八分目にたべれるようになったよ」「いつでも腹工合が充実していて、2分のすきがある」と。「だから、いつでも食べられるし、また食べなくてもよい」と。まったく非合理的な話ではありせまなか。しかし冬田君の健康は昔の冬田君を知っている人なら、このごろの冬田君は健康そのものです。50才頃までの冬田君は、まだ口では腹八分目など、と真事しやかなことを云ってはいたが、さて実行となると、薄志弱行の徒の見本みたいでした。ところが、この頃は言行一致できるようになったようです。その証拠だと彼が云ふのに、「糞を見よ」と自信満々なには、微苦笑ものですが、一理があります。一つ御自分のをごらんになったら、どうですか。

くさい話で恐縮ですが、20cm 以上の長い途中で切れない、とぐるをまいたような黄金色の一物は見事なものです。脱糞の快感は、また格別なものです。射精の快感とはちがった人間一生涯、男女老若を通じた醍醐味とは、このことではないでしょうか。小便を我慢に我慢したあげく放尿の快感もさることながら、脱糞の快感を毎

日毎日味う人生はたしかに動物的ですが、それさえ忘れ去った文明人などは可愛相だと、冬田君は云うのですから、恐れいった次第です。

◇

こんなことを云うとお互い様に凡俗さがわかります。なにしろ、健康のために、マスコミが、いろんなクスリを宣伝しています。キク薬ほどツカイ方に注意しないとんだめに会います。「過ぎたるは及ばざるが如し」とは昔の修身の読本にかいてありました。このごろは修身など云う言葉が道徳教育とか変わったらしいですが、ほんとの修身は文字通りに修身で、今様の道徳教育とは似もつかぬことではないでしょうか。飲食節あり、起居常あり、つねに凡俗の生活に無理のないところからはじまるので決して高級な概念や思想や技術が必要なものではないでしょう。いづれにもして矛盾だらけの人生で、生きのびようとするからには、抵抗があるのがあたりまえです。ねむっている時だけでも、すやすやと寝覚めのわるくないようにねたいものです。おきている時には自己を放出するの快感を味ひつづけたいものです。

冬田君は小学校の先生のようなことを云いだした。学校をでて、いわゆる社会人になった人たちが、実生活を体験しはじめた時、いやと云うほど現実の深刻さを味はされる。事実のまゝに、真実と真理が、ひんまげられる。こんなはずではない。科学と技術が生産にむすびつくとき、そこには抜くことのできない法則があることに気づく。人間は自然の法則から逃げられない、自然の法則を活用してこそ生活できる。さらに社会の機構についても、おなじことが比喩的に教えられる。だが、歴史は人間が創りだすものであり、人間と社会と歴史とは、不可分のものであることを知る。

進歩は人類の願いであり、歩みは足の役目であり、足がなくては動きがとれぬ。人間が四足から手を解放して技術が生まれ、科学が育った。生産力は云うまでもなく人間そのものに具ったものである。人間なくして何ものぞ人間の価値を経済学者が、いかように評価しようとも、その人間にとって絶対であって、一生涯は二度と繰りかえすわけにはいかぬ。じぶんの生命と他人の生命とをくらべて、素直に考えてみたら、と冬田君は云う。

もう考えることさえも、できないように飼育された人

間が世間に増えてくるようでは、と冬田君は感慨にふける。

◇

思いなおしたように冬田君は、こんな話をはじめた。「君、文明人の靴をみたまえ、日本人のゲタをみたまえ、ワラジをみたまえ」「アフリカの土人が靴をはきだしたよ。日本人も靴をはいているね。ワラジなどはもう道端に棄ててあるのを見ることさえできなくなった。」

日本には「ワラジをぬぐ」とか「古ワラジを捨てる」とか「ゲタをあづける」とか云うムトバがあったが、いまは到底、実感をこめて、このムトバが通用しておるとは思えない。ワラジがじぶんでつくられた時代は、もう過去のこととなった。「やぶれぞうりをぬぎすてる」実感で、草履の如く捨て去る時代は、いまでは靴の修繕料が新品を購うより高くなった状況では、現代人にはピンとこないだろう。

あとから、あとから新製品が消費者王様の購欲をかきたてる。人間でさえ、ふるい人たちは忘れ去られ、新人でおきかえられる。足軽は戦場の消耗品であった。鉄砲よりも兵隊は大切にされなかった。このことは、つい20年にもならない最近までの日本の通念ではなかったのか。産業界でも労働者が安い賃金で、いくらでも備える時代が過ぎようとしている。科学技術は生産性向上にまた産業合理化に、一も二もなく寄与している。

こう云う時代に「健康のしるしは頭寒足熱」の言葉が何を教えているか。「靴をはかせるために足をけづる」ことがどんなことか。「交通マヒが都市生活を、高速交通機関の事故が乗客を、いかにギセイにするか」。技術至上主義に、生産第一主義に、忘れてならないものを、うかつに忘れてはいないか。

冬田君の話はなかなかつきない。だが、やっぱり冬田君は象牙の塔の仕人だ。せいぜい「頭のさきから、足のさきまで、病むことなく、体の諸器管が快調で帽子をかぶっても窮屈でなく、運動に不自由でないキモノをきて、キチンと足にあった靴をはいて食うものにも不自由せず、住居も快適にコドモの教育にも不安でなく、死ぬときには眠るやうに、何の不安もなく。」と誰かにゲタをあづけたようなことを云っている。

(大阪大学医学部教授)